

# アフリカの人々と名付け 21

## 氏族、妻貸し、年齢組——名付けと社会構造

小馬 徹

タンザニア南西部のフィパ人は、双系的な出自形式を持つバントゥ語系の農耕民である。彼らも、前回紹介したロズィ人と同様に、単系的に操作された「出自名」を用いて集団としてのある程度の統合を実現している [Willis, R. G., *The Fipa and Related Peoples of South-west Tanzania and North-east Zambia*, 1996]。単系出自原理、特に父系出自原理は、集団の強固な統合を導くイデオロギーである。だから、ロズィやフィパでは「名前の政治学」がそれを模しているのだ。

### 同名者関係と「妻貸し」

過酷な自然環境の中を絶えず移動しながら狩猟採集生活を送る人々の間では、小さな家族だけが明確な社会単位である。移動バンドも絶えずメンバーが入れ代わって流動し、親族は明確な輪郭を持たない。彼らの間では、食料の確保や分配を初めとする協働と相互扶助のためには、あらゆる人間関係が持ち出され、活用されることになるであろう。

対照的な地理環境を生きているクン・ブッシュマンとイヌイット（エスキモー）で同名者に同一の人格を見出すよく似た観念があるのも、この点を考えれば理解し易い。後者では、異性の「名前の靈魂」(name soul) が入り込んだ赤ん坊をその霊と同じ性の者として育てる程、この観念は強いものがある。またターンブルは、ブッシュマンの間では同名者を助ける事が「法」のようになっている地域があると述べている [Turnbull, C. M., *Tradition and Change in African Life*, 1966]。

イヌイットには「妻貸し」と呼ばれる制度があった。遠来の訪問者があると一晩妻に性

的な奉仕をさせるのが最善のもてなしであった。また、長い期間遠方に狩りや交易に出掛けて留守にする時は、近所の知人や友人に妻を貸与した。交易の相手もまた妻を貸してくれた。妻を交換しあった者同士は兄弟にも似た関係になり、命懸けで助け合った。さらに、彼らの子供同士は義理の従兄弟関係になり、彼らも一生涯相互に助け合う義務を負ったのである [祖父江孝男『アラスカ・エスキモー』1972]。この制度もまた、同名者関係と同じ脈絡で解釈するのが妥当だと思われる。

### 「妻貸し」、年齢組、父系氏族

イヌイットの「妻貸し」と類似する制度を持っていたのは、ケニアやタンザニアのマサイ人である。彼らは広大なサバンナの乾燥した草原で牛を追って生活しているが、何処へ行っても同じ年齢組に属する者の家を捜し出して泊めて貰う事ができる。遠来の年齢組員に対する家主の一番の歓待は、妻を家に残して近くの同年齢組の家に泊まりに行く事だった。もし、彼に複数の妻がいれば、その一人に夜伽をさせた。客は家主の好意を謝絶できなかった。もしそうすれば、同年齢組員全体の呪詛を受けて落命すると信じていたからである [Hollis, A. C., *The Masai*, 1905]。

マサイのような東ナイル語系やキプシギスのような南ナイル語系の牧畜民族では、同一氏族は一地域に集住せず、広大な民族の領土全域に散らばって住む。こうした社会環境では、氏族の協働は理念的なものに留まり、日常生活では実効性が低い。それゆえか、東アフリカの牧畜民社会は、軍事機能を核とする年齢組体系を高度に発達させて社会構造の中

核とした事で知られている。年齢組体系は民族を統合する上できわめて有効な枠組みを提供した。彼らの周囲に住む農耕民も防衛のために類似の年齢組織を取り入れたが、現実には地域に集住する氏族の分節（リネージ）に細分され、氏族の統合が優先されている。従って、父系の単系氏族を持つといっても、両者における氏族の社会的な意味は決して同じではあり得ない。集団の統合機能と密接に関わり合っている命名の事情もまた、同様である。

### 農耕民と「氏族固有名」

東アフリカでは何処でも最も重要な名前は祖先に因む名前である。氏族や家に固有の名前が存在しないキプシギスとは対照的に、ウガンダのガンダでは、各父系氏族に限定的に伝わる「氏族固有名」(clan name)が知られている。ガンダ人は1950年代に既に100万人を超える大民族だったが、当時37ほどの氏族には、少なくともこの種の男性名が1,171、女性名が569あったと言う。或る名前は氏族が崇拝する特定の神の名に、また別の名前は職業に由来する。後者の例では、「金槌」、「鉄を扱って働く者」、「木炭」、「金敷を壊す者」などの名前が鍛冶屋氏族に伝わっている。人口に膾炙した本草師や、また始祖たちがその近くに住み馴染んだ丘、川、岩、森、泉、湖の船着場に由来する「氏族固有名」もある。始祖が埋葬された墓の上に繁った樹叢に彼の名前が付けられ、その名前が氏族に伝えられている場合も多い。墓から這い出た蛆虫を鳥が食い、その鳥の糞から芽生えた木が茂り、また鳥がその実を啄んで糞をし……というサイクルで発展した樹叢は先祖の象徴だと観念されているので、氏族員は誰もその樹叢の木々を決して切り倒さないのである [Nsimbi, N.B. "Baganda Traditional Personal Names", *Uganda Journal*, 14(2), 1950]。

### 命名と実父主義

ここで特に注意しておかなければならないのは、ガンダでは子供の認知に厳しい実父 (genitor) 主義が採用されている事だ。

ガンダの命名儀礼とは、先祖の名前を与える儀礼である。それを実施する特定の時期はないものの、その執行が成人としての地位を得る必須条件となる。儀礼は、父親または氏族の長の家で、妻と夫の両氏族の立会いのもとで行われる。子としての正統性を試す儀礼が実際の命名儀礼に先立って行われ、これが特に重要なのだ。保存しておいた臍の緒をバターに浸したうえで、母親がそれをビールと牛乳と水の混合液に落とす。臍の緒が浮けば正統性の証となり、命名儀礼がこれに続く。そこでは、最近死んだ者から始めて、父方の先祖の名前を父方の祖母が次々と読み上げ、子供が喜びを表した名前を与える [Kyewalyanga, F-X., *Traditinal Religion, Custom and Christianity in East Africa*, 1976]。

命名儀礼が往々氏族の長の家で行われる事は、父親が実父である事を確証する儀礼の執行と共に、世代を超えた氏族・家の一体性の著しい強調となっている。このような厳格な実父主義は、西欧近代法の影響が及んだ今日でも、キプシギスを初め、牛牧の民カレンジン諸民族では見られない。母親の産んだ子供は実父が誰であろうとも父親の子供として歓迎するのが、彼らの伝統であった。

タンガニーカ、キブ、モブツ、キョーガ、ヴィクトリアなどの大湖が連なる地帯に住む、いわゆる湖間バントゥ (interlacustrine Bantu) 諸民族には、ガンダと相同の「氏族固有名」を持つものが少なくない。彼らの命名法の実父主義には、氏族の統合を政治的に何よりも優先するイデオロギーが窺われる。それは、年齢組体系によって氏族を横断した広大で平等な民族空間を形作った、カレンジン諸民族の社会論理とは相いれないものである。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)